

# 神世界からの来訪者

禅

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

遙か昔、ヴェルダナーヴァによっていくつもの世界が作られた。

だけど、もし。そのヴェルダナーヴァの他にも、「神」と位置付けられる存在がいたら…？つて話。

基本Web版の原作終了後を主軸に書いていきます。設定等でおかしい点がありましたら、是非是非コメント欄に書き込みをお願いします。

※pixiv様でも公開しております。

# 目次

鬼姫の奇行

赤と蒼の神	1
隻翼の少女	5
物騒な悪魔	11
自堕落な堕天使	16
欲求不満の鬼姫	22
見極める大魔王	29
幕間——ルナの日常	39
魔王達の宴	50
刺客の襲来	59
勇者の懸念	67
星王の再臨	80
星王の要求	87



## 赤と蒼の神

言いたいことは五つ。

・突然、転生したらスライムだった件の二次創作を書こうと思い立って初投稿しました。

・時系列は天魔大戦後を考えてもらえるといいです。

・基本はWeb版の設定を基本に書いていきますが、もしかしたら所々違うところもあるかもしれないので、そのようなことに関してはコメント欄に書き込みをお願いいたします。

・主はカレラ推しです。

・オリキャラ、オリ設定を取り入れていますので、そのようなものがNGな方はご注意ください。

以上の注意点を踏まえた上で、「読んでやるよ、仕方ねえなあ」という方は、温かい目で見てください。

それでは、どうぞ。

遙かな昔。リムル達の世界が生まれるよりも、さらに昔の出来事。

ここは、リムル達の世界から、とてつもなく遠く、近い場所。

何も無い空間に、ただ、『白い』という概念だけが存在している。

『なあ』

ただ白いだけだった空間に、一筋の光が差した。赤く、荒々しいその光は、瞬く間に空間を侵食していく。

『なんだい?』

空間に新たに光が差し、赤い光は侵食を止めた。

赤い光の侵食を遮ったその光は、蒼く、冷酷な輝きを増し、自らの領域を瞬時に塗りつぶした。

『あの竜、どう思うよ?あの、ヴェルダナーヴァとか言う』

赤い光から、思念が響く。それに共鳴するように、蒼い光からも思念が発せられた。

『そうだね……珍しいケース、としか』

赤い光が微かに揺れる。

『盗る気か?』

その思念は、明らかに威圧の意を含んでいた。

赤い光がゆらゆらと揺れ幅を大きくしていき、空間に他の介在を許さない、なんとも言えない圧迫感が膨れ上がっていく。

『どうだろうね。気が向いたら、かな』

赤い光の威圧に対して蒼い光は、少しも物怖じする様子を見せず、悠々と言い放った。

『……まあ、お前が気分屋なのは今に始まったことじゃねえしな。別段、強く問い詰める気はねえよ。こつちが気に病むだけ損ってやつだ』

空間の大部分を支配していた赤い光が明滅を始めた。それに伴って、蒼い光もその濃さを薄め始める。

『ただ、一個だけ言っとくぜ。俺に楯突くのは、どんな状況だろうとよした方が良い。肝に命じとけ』

『了解』

偶然か必然か、二つの光が空間から消えたのは同時だった。

赤と蒼。

このとき、二つの光が拮抗していたのは、リムル達にとっては幸いだったのかもしれない。

でなければ、蒼い光はすぐにもリムル達の世界の創造主、ヴェルダナーヴァを仕留めていただろうから。

そして、遙かな時を経て――

――リムル達の世界に、一人の来訪者が舞い降りた。

## 隻翼の少女

朝。

古来より、人は太陽が昇るこの時間から活動を始めるとされている。

この世界でも、それは変わらない。魔物にも、人間と同じ『朝』の感覚はあるのだ。それ故に、朝はこの魔物テンベストの国も静かな雰囲気テンベストに包まれる。

……ごく一部を除いては。

「シオン？今日は私がリムル様を起こす番だった筈では？」

「いえ、シユナ様。昨日はディアブロが起こしてしまいましたので、あれはノーカウントです！」

「リムルはワタシが起こすのだ！なぜなら、リムルの『親友』マフダチはワタシなのだからな！」  
何故、こいつらはこんな時間からここまで騒がしく出来るんだろうか。

最早恒例となったこの朝の聖戦だが、今日はミリムがいる分、また一段とうるさい。でもまあ、ミリムに関してはベットに潜り込んでこなくなっただけ成長したかな？

「はあ……全く。良いですか、脳筋のミリム様とシオンに、繊細なリムル様のお世話が務まるはずがないでしょう」

シユナが呆れたような声で二人を挑発した。

それにしても、脳筋って。決して否定は出来ないが、この前俺リムルンの分身ムルンを真つ二つにしたシユナが言うのはあまり説得力がない。

なんにせよ、この様子では、今日も聖戦の勝者は変わらなさそうだ。

「リムル様、ディアブロです。朝の準備が整いましたので、お呼び立てに参りました」  
ほらね。やっぱり。

聖戦を華麗にスルーして、見事俺のもとにたどり着くのはいつもディアブロである。

日々磨かれていくその技術に驚嘆しているのは秘密だ。

「ああ、おはよう。すぐ行くよ」

俺が返事をする、ディアブロは満足げな顔をして扉から出ていった。

さて、と。俺も、そろそろ準備をしようかね。まずは服を着替えないと。

こうして、俺は一日の活動を始めるべく、入り口付近からいまだに聞こえてくる騒ぎ声をBGMに準備を始めたのだった。



「今日の予定は——」

執務室に向かう途中、ディアブロから今日の予定を読み上げられる。

内容は全てシエルに記録してもらっているので、俺はただ頷いているだけで良い。

え？そんなんでいいのかって？

いやいや、シエルさんは俺のスキルなんだから。そのシエルさんがやっていることは、俺がやっているも同然でしょう。

……かなりの暴論だな、訂正しよう。

シエルさん、いつもありがとうね。

《はい。遠慮しないで、どんどん頼ってください、旦那様！》

う、うん。よろしく。

あと、多分マスターの字が間違っていると思うから、直しておいてくださいね？

「——といったところです。よろしいですか？」

おっと。シエルさんのボケに突っ込んでいたら、いつの間にかディアブロが説明を終えていたみたいだ。

《私は至って真剣ですよ！》とかなんとか聞こえた気がするが、気にしないでおこう。スルーだスルー。

「分かった。ありがとうな」

「クフフフ、お褒めに預かり光栄です」

ディアブロにお礼を言うと、俺達は黙々と執務室への道を歩いていく。

静かなお陰で、遠くの鳥の囀りが聞こえてきた。

こういう朝も良いよな……と俺が感傷に浸っていると、魂に語りかける声が聞こえた。

『——今日は、良い日になりそうだ——』

『ああ、そうだな』

反射的に返して、ふと違和感を感じる。

あれ？今、誰が話しかけたんだ？

「なあ、今お前何か言ったか？」

「いいえ、特には？どうかありませんか、リムル様」

ディアプロはこの反応。じゃ、他の誰かからの思念伝達？

《そのようなことは確認されていません。》

うーん。俺の中にあるシエルが言うなら、そうなんだろうけど。

おかしい。確かに、声が聞こえたはずなのだ。

気の、せいなのか？

『リムル様！至急ご報告がございます！』

そんな疑問は、直後に聞こえてきた緊迫した声で一瞬で吹き飛んでしまった。

もしかしなくても、この思念はソウエイのもの。

あの冷静沈着なソウエイが、ここまで慌てるとは。一体何事だ？

『どうした？』

『ただいま、突如として強力な魔物が現れ、我が国の国境を越えて近くの森を荒らし回っているとの報告が、ソーカから寄せられました』

強力な魔物？そんな気配は感じなかったんだが。

『どのくらいの強さなんだ？お前でも処理ができないのか？』

『いえ、もう既に捕縛は完了しました』

報告を聞いて、内心ホッとする。

あの緊迫感だったから、『ソウエイだけじゃ対処不可能だったんじゃないか』とか考えてしまったが、よくよく考えれば覚醒魔王級のソウエイが手間取る相手なんて、そうはいない。

というか、そこまで強かったら俺の脅威の一つに認定される。

そんなぼつと出の魔物が、俺の脅威になる訳がなかった。

——その、はずだった。

『……ですが、その種族と強さが問題です』

『ん？そういえば聞いていなかったな。その魔物の種族は？』

ソウエイから放たれた言葉に、俺は絶句した。なぜなら——

『片翼が欠けていますが、黒い翼を持った姿から察するに、ディーノ様と同じ墮<sup>フォールン</sup>天族の少

女。それも、覚醒魔王級です』

——全てが、『想定外』だったからである。

## 物騒な悪魔

「リムル様、こちらです」

ソウエイから連絡を受けて、少女を保護している場所へとやってきた。

扉を開けて中に入ると、そこにはソウエイの報告通り、隻翼の少女が横たわっている。

ソウエイの報告で『覚醒魔王級の強さ』の、『墮天族』<sup>フォールン</sup>の、『隻翼の少女』と聞いてかなりの衝撃を受けた。

だが、実際に見てさらに想定外だったのは、異常なまでの存在値<sup>エネルギー</sup>の低さである。

先程ソウエイに聞いた話によれば、この少女は覚醒魔王級の実力を有しているらしい。が、今の少女から感じる魔素量は精々A―程度。とてもではないが、覚醒魔王級の実力を秘めているとは思えない。

「本当に、こいつが？」

「ええ。我ら藍闇衆<sup>クラヤミ</sup>総出でなんとか捕らえました。まだまだ不甲斐ない我らをお許しください」

ソウエイは、俺の前ではいつも『完遂』の報告ばかりだ。

今回は、それが出来なかったからこんな落ち込んでいるのか。

失敗したわけではないのだから、そんなに悲観することはないと思うんだけどね。

「あ、ああ。よくやった。あとは俺に任せて、ソウエイは仕事に戻れ」

「御意」

俺が命じると、ソウエイは自分の持ち場へと戻っていった。

今部屋にいるのは俺とディアブロ、そして少女。

とりあえずは、少女をシエルに解析鑑定してもらおうか。まだ墮天使だと決まった訳ではない。

シエルさーん！

《解。解析鑑定の結果、個体名ティーンと同じ、墮天使であると考えられます。》

あ、そう。墮天使ねえ……。

ティーン……あいつは確か、ヴェルダナーヴァ側のスパイとして墮天使になったんだよな。他の二人と一緒に。

うーむ。そう考えると、簡単には墮天使なんていないと思うのだが……。

「ディアブロ、どう思う？」

困った時のディアブロ頼み。ディアブロは悠久の時を生きる悪魔だけあって、こういう時には一番頼りになるのだ。

俺が疑問を投げかけると、ディアブロはしばし腕を組んで思索し、その考えを口にし

た。

「殺しますか？」

「ああ……いや待て待て待て待て！なんでそうなる？」

訂正。ディアブロは少し物騒なところがあるので、気を付ける必要がある。

というか、なんでそうなった!？

「クフフフ。我らが崇高なるリムル様の国を侵略し、あろうことか貴重な時間さえも奪う正体不明の墮天使……殺すのが最善かと」

そう言いながら、親の仇でも見るような目で少女を睨むディアブロ。

ええ……俺の時間とったぐらいでそんな……。

いや、確かに時は金なりって言うけども。

素直に慕ってくれるのは嬉しいが、ここまでくると少し怖い。主に俺が。

「ディアブロ、穏便に解決する方向で頼む」

「そうですね……まずは正体を掴むところからでしょうから、ディーノ様に連絡をしてみてもいいかがでしょうか？同じ墮天族フォールンのディーノ様なら、何か知っておられるかも知れません」

こうして『穏便に』という条件を付けてやつと、まともな意見が出てくる。全く、困ったものである。

それはそうと、ディーノに聞いてみるのは確かに良い手段だ。

あいつは今、天空界で遊んでいるはず。

……仕事？あいつがやってるわけがないだろう。

というわけで、暇なディーノ君に、一つインタビューに行ってください。

「ディアブロ。少し、天空界へ行って。お前は、この少女を見張っておけ。もしもの

時は、お前が取り押さえてくれ。頼む」

「クフフフ。お任せください。わが主よ」

「殺すなよ？」

「……はい」

なんだ今の間は。怖い、怖いですよディアブロさん。

ま、まあとにかく、今は少女の正体を突き止めることが最優先だ。

もしかしたら、敵、なのかもしれないし。

そう考えながら、俺は天空界へと転移していった。



敬愛する主が転移したことを確認し、ディアブロは部下に命令を発した。

『リムル様の脅威になり得る正体不明の墮天使が出現した。

世界に何かが起こっている可能性は捨てきれない。

ここ最近で起きた世界の異変を全て調べ、報告せよ!」

部下の悪魔達はディアブロからの命令を受け、行動を開始する。

このディアブロの行動によって見つかる異変が、世界を巻き込む大騒動に発展していくことなど、このときはまだ、誰も知るよしはなかつたのである。

## 自堕落な墮天使

退屈だ、と、デイーノは思った。

ふと、自分の主が魔物の国へ出かけていることを、思い出す。

あの国には、退屈というものが存在しないように思える。

食べ物に旨くて種類も多いし、娯楽はいくらでもある。

ちっ。俺も付いていけばよかった。

まあ、すぐフレイに連れ戻されて終わりだろうけどな。

こういうときは、リムルに貸してもらった漫画を読みながら惰眠を貪るに限る。

そんなことを考えていると、目の前に強烈な気配が転移してきて、腰を抜かした。

その気配は――



「リムル！いきなり転移してくるなよ！お前の気配はデカいから驚くんだよ！」  
転移して、挨拶よりも前に言われた言葉。

だが、別に気にしない。

こいつは仕事をサボって俺が貸した漫画を読みながら惰眠を貪っていたのだ。自業自得だろう。

あれは……呪○廻戦の最新刊か？

俺が読む前に貸してやったから、そろそろ返して欲しいんだが。

「デイーノ。その漫画、読むの何日目だ？」

「あー！リムルお前！そこは俺の生得領域だからな！その中ではお前は俺に……」

「何日目だ？」

「……十日目」

サボりすぎだろ。いくらなんでも。

「で、お前は一体何の用だ？ミリムのことなら今フレイが連れ戻しに行つたぞ？」

早く帰れと言わんばかりに、デイーノはソファアーに寝転がって再び漫画を読み始めた。

一回どついてやろうかとも思ったが、話が進まないのは困るので、我慢である。

「それは大いに助かるが、その事じゃない。お前に用があるんだ」

そう言うと、いつも半開きのデイーノの目が僅かに見開かれた。

デイーノは漫画をソファアーに置くと、きちんと座り直す。

いつものデイーノとはとても似ても似つかない姿に、思わず笑いそうになるが、それはなんとかこらえて。

俺は単刀直入に、デイーノに話を切り出した。

「お前、お前ら三人以外で墮天族<sup>フォールン</sup>って知ってるか？」

俺の一言に、デイーノは体を強ばらせた。

その表情から明らかに動揺しているのが見てとれる。

しばらく間をおいて、今度はデイーノから言葉が発せられた。

「天使が魔に転じるのは、長い歴史でみればそんなに珍しいことじゃねえ。

お前も知ってる有翼族<sup>ハービイ</sup>や長鼻族<sup>テング</sup>だっけそうだし、俺の部下の天魔族<sup>エンジェル</sup>だっけそうだ。

……だが、墮天族<sup>フォールン</sup>となれば話は別。

天使の性質を残したまま墮天するのは、容易なことじゃない。

そんなことができたのは俺達くらいだ。

何の理由があつて墮天族<sup>フォールン</sup>を探してるのかは知らないが、諦めることだな。絶対に見つ

からねえよ」

そう言いきると、デイーノは漫画を読みに戻った。

こいつ、後でフレイさんに怒られるのを見越してサボってるのか？

だとしたら、相当な精神力の持ち主だな。少しだけ見直したよ、デイーノ君。

しかし、これですます少女の謎が深まった。

デイーノの知らない、正体不明の墮天使が、俺の国にいきなり現れて、暴れたつてこ  
とだろ？

自分で言っている意味が分からない。

デイーノは俺が墮<sup>フォールン</sup>天族を探していると思っっているようだが、素直に明かして協力して  
もらうのは良いんだろうか？

《解。この事案は何処かの国の陰謀という可能性もあります。もう少し慎重に行動する  
ことを推奨します。》

俺がどうすべきか悩んでいると、シエル先生からの助言が届いた。

確かに、あまり大事にはしたくない事案ではあるが——

——果たして、大事にせずに解決できる事案なのだろうか——

『リムル様！至急お戻りください！』

突然届いた思念に驚いて、思考が一瞬停止した。

この声はディアブロか？

『どうした？何かあったか？』

『いえ、それが——』



リムルが驚いた表情をして、『分かった、すぐ行く』と呟く。

大方、魔物の国テンペストで何かがあったのだろう。

「ディーノ！俺は急用ができたので帰らせてもらおう！あと、これは返してもらおうぞ！俺まだ読んでないんだからな！」

手に持っていた漫画が消えた。

否、リムルに奪われた。

「え、おい！ちよつと待っ……行っちゃったか……」

反論するよりも前に、リムルはその場を後にしていた。

全く、何故ああも強いんだあいつは。

魂もどこかヴェルダナーヴァ様に似ていて……。

そういうえば、とディーノは今ほもう臆気にしか覚えていない、かつての主との会話を思いだす。



『僕はね、この世界の他にも、別の世界があると思うんだ』

『？それはそうでしょう？あなたがそう作っただから』

『いや、そうじゃなくてね。僕の他にも、別の神がいて、その神が僕のいるこの世界の外側で、いくつかの世界を作っているんじゃないかってこと』

『そんなバカなことが……』

『あるわけがない。確かにそうだ。でもね、こうも考えられるんだよ。僕達というものがこの世界に存在している限り、『絶対にありえない』なんてことは、ないんだってね』  
『へえ……』



デイーノは思う。この世界に、墮天族フォールンは自分達三人以外にはいないだろうと。

だが、それはあくまでこの世界での話だ。

万が一、本当にヴェルダナーヴァの言う通り、この世界の外側にヴェルダナーヴァと同じ『神』が居て、この世界によく似た別の世界があったとしたら……？

あまりにも馬鹿馬鹿しいリムルとの会話だったが、過去の主との会話を思い出せたことだけは収穫だったと、デイーノはソファアにその身を預けながら思うのだった。

## 欲求不満の鬼姫

俺がディアブロから連絡を受けて転移すると、そこには先程の少女を着せ替えて遊んでいるシユナ達が出た。

一瞬、少女に敵対の意思がある可能性を考えて身構えたが、少女が無抵抗であたふたしている姿を見て、ほっと胸を撫で下ろす。

あの少女は確かに美少女だからな。新作の服の格好の餌食になってしまったらしい。ディアブロはというと、面倒なことには関わりたくないのか、我関せずを決め込んでいる。

だが、俺にそれを咎める気はない。なんとたつて、俺がそうするように教えたのだから。『よく頑張ったな、ディアブロ。あとは任せろ』

『クフフフフ。そう言っていたら、私も我慢したかいがあったというものです』  
我慢……？という言葉がどうにも引つ掛かったが、そこはいちいち気にする俺ではない。ディアブロとの付き合いも、もうなかなか長いのだ。

もつとも、ディアブロの生きてきた年数に比べれば、微々たるものなのだろうがね。さて、まずはシユナを止めないことには話が進まない。

なんとか、話を始めないと。

「シユナさん？一回それを止めてもらっても……？」

「あら、リムル様！おいででしたか！それよりも、見てください！可愛いと思いませんか  
!?!」

「こちらが良いですね！ああ！もうどうしましよう！」

「そうです！今度イングラシアでファツションショーがあるんです！是非ウチのモデル  
として出ていただきたい！」

「えっと、その……私は……？」

シユナの目がガチだ。あれは正に草食動物を前にした肉食動物……！

俺もあの状態になったことはあるので、その恐ろしさは身にしてみている。

あの少女も美少女なだけあって、シユナの服を選ぶ目に凄まじい熱気がこもっている  
のだ。

そんなわけで、シユナ以外の皆も、目の前の極上素材に食いついてこちらには目もく  
れない。

俺が最近着せ替えを拒んでいたせいかな、少々欲求不満なのかもしれない。

……どうしよ、これ。

ディアプロは頼りにならない……というかここで助けを求めたら格好がつかないし

……ベニマルとソウエイはなあ……あれだろ、ちよつと。

シオンに至っては、シユナに便乗して脅威が二倍になる可能性さえある。

誰か頼りになりそうなやつは……。

そ、そうだ！俺にはシエルさんという素晴らしい味方がついてるじゃないか！こんなときはシエル先生に相談だ！

シエル先生！どうすれば良いんですか？

《解。今から言う通りに、言葉を発してください。そうすれば、この状況を打開できます。》

おお！流石はシエル先生！どこぞの悪魔と違って、物騒な手段じゃなく穏便な『話し合い』で解決してくれるのか！

じゃあ早速、お願いします！

えーと、なになに……

「シユナ。今なら、お前の気が済むまで俺を着替えさせて良いぞ。……つて！ちよつと！やっぱり今のな——」

遅かった。

俺は、目の前の鬼姫の、服に対する執念を軽く見ていたのだ。

俺の前言撤回の言葉が届く前に、シユナは俺に近寄り、流れるような動作で服を脱が

せ始めた。

その鬼気迫る（シユナだけに）周りの雰囲気から、訂正する気力も奪われてしまい――結果、俺はそのまま拘束され、あれやこれやと服を着せられることになってしまったのである。



いやーキツかった。凄く。

まさか、シエルさんがあそこで私利私欲に走るとは。

さしもの俺も予想外だった。

《嘘はついていませんよ。それに、一番早く穏便に解決するには、この方法しかありませんでした。仕方がないことなんですよ。それにしても、どの衣装もよくお似合いですよ、旦那様！》

あ、ありがとうございます。

でも、その『これしかなかった』って、本当ですかシエルさん……？

二時間が本当に、最短ルートなんですか……？

……まあ、いいか。別に数時間くらい。

この程度、いつも頑張ってくれているシエルさんへの労いだと思えば安いものである。

ただ、そのマスターって呼び方、漢字が違うと思いますよ？

いつも通り、主様でお願いします。

さっきの様子から、危険がないと判断した少女は、今は別室でシユナに諸々の身だしなみを整えてもらっている。

ちなみに、俺のそばにいたディアブロは仕事に戻ってもらった。

少し寂しそうだったので、後で何か差し入れでも持つて行ってやろう。

そうそう、ディアブロといえば、着替え地獄の途中、隣のディアブロが『尊い』を連呼しながら恍惚とした表情をしていたのにはちよつと引いたな。

ディアブロといい、ゼギオンといい、アダルマンといい……何故皆、俺をそんな神格化するのだろうか。

何？俺には見えない魅了のスキルがあるとか？

《解。そのようなスキルの存在は、確認出来ません。あつたなら、とうの昔に私が統合して隠蔽していますから。》

はっはっは、だよな。知ってる。

……え。

「リムル様。準備が出来ました」

扉のむこうから、ご機嫌なシユナの声が聞こえてきた。

無事ここ数ヶ月分の欲求不満を精算したからか、声から機嫌の良さが伝わってくる。

入室を促すと、シユナに続いて、藍色の浴衣を身にまとった美少女が入ってきた。

目の色はサファイアを彷彿とさせる深い青色で、腰まで伸びた紫色の長い髪が、その美しさを引き立たせる。

背中には、墮天使の象徴たる漆黒の翼が、右側にのみ現れていた。

「座って、話をしよう。君が誰で、どこから来て、何をしに来たのか。それを、聞きたいんだ」

真剣な表情で、少女に着席を促しながら、用件を伝える。

さっきの時点で敵意がなかったとはいえ、魔物の国の領土を荒らし回ったのは確かだ。それがどういふことなのか、それを聞かないことにはまだ、この少女が敵である可能性は捨てきれない。

少女はソファアーにゆっくりと座ると、俺の方にむかって困惑した笑みを浮かべながら、言った。

「あの、私、誰なの？どうして、ここに……？」

俺の頭に、前世のドラマやアニメでよく聞いた、四文字の熟語が思い出された。

# 見極める大魔王

## 『記憶喪失』

それは、ドラマやアニメでよく耳にする症状だ。

だがまさか、始めて本物の記憶喪失の人に出会うのが異世界になるうとは。

人生——もとい、スライム生というものは、なかなか分からないものである。

「私……自分がどこから来たのかも、誰なのかも分からないんだ」

少女は、自分の記憶がないことに戸惑いながらも、精一杯の愛想笑いを浮かべているようだった。

見ている、とても痛々しい。

「私は誰でもどこから来たの？あなたは、私のこと知ってるの？」

すぎるように、俺に問う少女。

この少女は確かに墮天使だが、同じ墮天使のディーノによれば、この世界にはディーノ達以外の墮天使はいない。

で、こいつは記憶喪失でどこから来たのかも、自分が誰なのかも分からない。

となると、残された可能性は別世界からの転移者か、少女が嘘を吐いているかのどち

らからだ。

しかし、魂の管理者としての『天使』や『悪魔』といった存在は、ヴェルダナーヴァと最も関わりが深いであろうこの世界にのみしか存在しない筈。

じゃあ、この少女は嘘を……？

あの痛々しい表情が嘘だとは到底思えないが、念には念をとという言葉もある。俺はこの国の元首として、あらゆる危険は取り除いておかなければいけない。

嘘、か。出ていってもらってから早々に悪いが、ここはあいつを呼び出すのが最善だろう。

『ディアブロ。聞こえるか？お前にちよつと頼みたいことが』

「クフフフフ。何なりと。我が主よ」

聞こえたのは思念伝達の声ではなく、直接的な音声だった。

ディアブロは、俺の思念伝達を聞いてコンマ何秒で反応し、ここに馳せ参じたのである。

ホント、何なんだろうね。このこいつらの狂信っぷりは。

あれ？俺思考誘導かけてないよね？

《そのような事実は確認できません。》

うん。

……じゃあやつぱり、素でこれかあ……。

まあいい。今はそれより、少女の言葉を見極めてもらうのが先決だ。

『ディアブロ。この少女が嘘を吐いているかどうか、『穏便に』調べてくれ。拷問とか、物騒なのはNGだ』

もし嘘を吐いていた場合、対策をされては困るので、思念伝達を使ってディアブロに用件を伝える。

ディアブロは後ろを振り向くと、そこにいた少女をしばらく見つめ、やがて『ほう……』と興味深そうに目を細めた。

『先程と魂の質が違いますね……変質する魂とは……クフフフ。なんと面白い。  
魔神王デモンロードの名にかけて、必ずやこの魂を見極めてみせましょう！』

嬉しそうにそう言うと、ディアブロは少女に近寄り、観察を始める。

少女は、いきなり現れたイケメンに観察されているからか、おどおどとして落ち着かない様子だ。

何だろう。イケメンが美少女をまじまじと観察している構図が、どこかナンパに似ているような気がする。

俺に経験？あるわけないだろ。元魔法使いで賢者予備軍だぞ。

……自分で言っていて悲しくなってきた。はい、この話は終わりです。

《それは周りの女に見る目が無いんですよ！ほら！私なら何時でも大歓迎ですよ！分身体を使えば簡単に——》

俺しーらない。スルーが一番。これ常識。

ところで、シエルさん？ディアブロが魂の変質とかなんとか言ってたけど、あれって……？

《是。事実です。少女の魂は、寝ていた時と違い、存在力エネルギーの総量が覚醒魔王級にまで引き上がっています。》

そんなことってあり得るのか？

さつきは存在力エネルギーを一部秘匿してたって可能性は？

《否。ありません。あの時点で潜在している力も全て、主様マスターは把握していました。》  
そうか……。

だとすると、これは一体どういうことだ？

俺がいない間ずっとディアブロが見張っていた以上、『変質者』みたいなスキルで何かと合体したのならすぐに分かった筈だ。

ディアブロからそんな報告は受けていないし、何より表面的な魂の質は似ているような気がするので、別人という可能性もないだろう。

……まさか、本当に魂の変質が起こったっていいのか？

信じられないが、ここまでくるとそれしか考えられない。

とりあえず、今はディアブロのジャッジが終わるのを待つのみだな。

『リムル様。終了しました』

はやつ！俺、今もう少し待つことを覚悟したところだったんだけど!?

ま、まあ、早く終わったのならそれにこしたことはない。

早いところ、結果を聞くとしよう。

『で、どうだった?』

『いくつか揺さぶりをかけてみたのですが、どれもこれといった反応はありませんでした。それどころか、少し怯えが感じられるほどでした』

『怯え……何も知らないからか……?』

『そうですね、恐らくは。ですので、この少女の言っていることは本当だと見てよろしいかと』

うーん……そうなると、もう、あり得る可能性が……。

なるほど。これが手詰まりってやつか。

こうなったら、信頼でできる魔王とかに相談するしかないな。

魔王<sup>ワルプルギス</sup>達の宴を開こう。

発動は俺で、承認はラミスと丸め込み、ディーノを脅すかミリムに頼めば事足りる。

あとは、またギイやルミナスがうるさそうだから旨いお菓子でも持って行って、——  
「……………知ってるの？」

俺が魔王<sup>ワルプルギス</sup>達の宴へ持っていく菓子を考えていると、少女の問いが耳に入った。

あ。忘れてた。返答がまだだったんだ。早く返答を——  
ん？待て。ここで、真実を口にしても良いのか？

俺は何一つ分からないが、少女にしてみれば、何もかも分からない状態で身に覚えのないことを咎められている、そんな状況だ。

何もするものがない少女に、ありのままの真実を告げる。

それは本当に——

——正しい選択なのか？



暫し、耳の痛くなるような静寂が俺達を包む。

そして、俺はゆっくりと口を開いた。

「いいや。知らない。でも」

「君が記憶を取り戻すまでは、俺達<sup>テンペスト</sup>魔物の国が、責任を持って君を保護する。だから、安心してくれ」

俺は少女に歩み寄り、その手を優しく握った。

「……そう。ありがとう」

少女から、満面の笑みが溢れる。さつきと違って、無理のない、心からの笑顔。

悩みに悩み、俺が出した結論は、真実を話しつつ、少女の心に寄り添うことだった。

正体不明の墮天族フォールンだろうと、存在している以上、どこかにルーツは存在している筈だ。

そのルーツを見つけ出し、本人の希望にそって送り届けてやればいい。

万が一それが悪意を含んだものだったとしても、それなら尚更、俺の目の届く場所に

置いておいた方が良い。

俺の身に危険が及ぶ？そんなこと、気にするに値しない。

なにしろ、俺は『大魔王リムル』なのだから。

「ところで、君……名前があった方が呼びやすいな。何か良い名前は……」

「ルナ、なんてどうです？リムル様」

「え？」

そう呟いたのは、シユナ。

今までのやり取りを無言で見守っていたシユナが口を開いたので、俺は思わず驚いてしまった。

そんな俺に構わず、シユナは名前の由来を説明し始める。

「リムル様のいた世界の言葉で、月は『ルナ』というそうですね。月は満月でも美しいですが、欠けているのもまた風情があります。翼が欠けているのにも関わらず美しいこの子には、ぴったりなのでは？」

ルナ……って、確かラテン語だよな。

どこからそんな言葉を知ったんだ？俺、教えたっけ？

まあ、それは置いておくとして……ルナ、ルナか……。

うん。響きがいい。それにしよう。

「よし。じゃあ、君は今から記憶が戻るまで、ルナを名乗るといい。……で、大丈夫？」  
危ない危ない。こういうことは本人の意向を優先しないと。

俺が少女に問いかけると、少女はこくこくと首を縦にふって肯定の意を示した。

それと同時に、俺の魔素が一気に減っていく。

な、なんだこれ。今までに類をみないほどごっそり持つてかれたぞ。

というか、これも名付けに入るのかよ！

それならそうと、先に言ってくれ……心の準備があるんだから。

《<sup>マスター</sup>主様も学びませんね……。不用意に名付けをしてはいけないって、何度言ったら分かるんですか。この前だって、観葉植物に愛着が湧いたからって名前なんかつけるから、大変なことになったじゃないですか！少しは自重してください！ぶんぶん！》

と、名付けで大量の魔素を抜かれてシエルさんはご立腹の様だが、そもそもシエルさんだってそんなノリで進化したような気がするの俺だけか？

それに、自重してって台詞に関しては、シエルさんにそっくりそのまま返したい。ゼギオンとか、あれヤバすぎだろ、普通に。

《……》

おっと。これ以上の追及はやめておいた方が良さそうだ。

少なくとも、明日からの書類整理にシエルさん無しはキツすぎる。

まあ、とにかく。この後は魔王達ワルプルギスの宴の発動と、ギイ達への菓子を準備しなきゃいけないから、早々に席を外すでしょう。

俺は椅子から立ち上がり、転移の準備を始める。

「あの、リムル、お姉さん？」

進化の予兆なのか、うつらうつらしているルナが言った。

お、お姉さんって……中性的な容姿だから仕方ないか。

「なんだ？」

「よろしく、ね」

「……ああ、よろしくな、ルナ」

倒れこむルナをシユナが支えたのを見届けると、俺はミリムから魔王達ワルプルギスの宴の発動に

承認をもらおうべく、ミリムがいるであろう迷宮へと転移していった。

## 幕間―ルナの日常

ルナが魔物の国に現れてから、一週間。

俺はあのあと、すぐに魔王達の宴を発動したのだが、ギイのバカが『良いが、代わりに今度、魔物の国に行かせろ』とかなんとか言い出したのを皮切りに、皆が皆魔物の国を訪問したいと言い出し、挙げ句の果てに『じゃあ今回の会場は魔物の国で良いのではないか』という意見まで出る始末。

全体的な流れとしてそうなってしまった以上、俺は断りづらいことこの上ないわけだ……。

結果、シエルさんと相談し、一ヶ月の猶予をあけて、魔物の国での魔王達の宴が開催されることとなった。

出席者は以下の通り。

悪魔族…暗黒皇帝”ギイ・クリムゾンと、その配下ミザリー、ヴェルザード。

竜人族…破壊の暴君”ミリム・ナーヴァとその配下、ガイアとフレイ。

妖精族…迷宮妖精”ラミリスと、その配下としてベレッタ。

巨人族…大地の怒り”ダグリユール…は、欠番のため、代理でダグラ、リユースラ、

デブラのシオン親衛隊。

ヴァンパイア 吸血鬼… クイーン・オブ・ナイトメア 夜魔の女王”

ルミナス・バレンタインと、ヒナタ、それに執事のジルさ

ん。

フォールン 墮天族…

スリーピング・ルーラー 眠る支配者”

デイーノ。それと、ミリムの護衛枠に入れなかったカリオ

ン。

人魔族…

ブラチナデビル 金髪の悪魔”

レオン・クロムウエルと、クロエにクロード。

さらに、今回の話題である謎の墮天族、ルナ。

そして俺。

スライム 妖魔族…

カオスクリエイト 聖魔混世皇”

リムル・テンペスト。従者には今回、リムル十二守護王と

ヴェルドラから、くじ引きでカレラとヴェルドラが選ばれた。

従者といっても、今回の会場はここ魔物の国だ。テンバースト何かあれば、皆すぐに駆けつけてく

れるだろう。従者なんて、俺の隣に立つ権利ではない。

別に、そんな取り合うようなものではないと思うのだがね。

それはそうと、俺、絶対ヴェルドラは究極能力『混沌之王』の『確率操作』を使っ

アルティメットスキル ナイアラルトホテツブ

たと思う。というか、確信だな。

全く、我が儘の塊のようなやつである。

だが、あいつはあれで丸くなった方らしいから、多少のことには目をつぶってやると

しよう。同じファミリィネームをもつ、盟友として。

さて。そんなわけで、魔王<sup>ワルブルギス</sup>達の宴が開催されるまでの一ヶ月、ルナは魔物<sup>デンプェスト</sup>の国で、束の間の休息をとることになった。

ここからは、その期間のルナの様子を、特別なイベントごとに綴っていきましょう。



一日目。幹部達を集め、皆にルナを紹介した。

「恐い……」

肝心のルナは幹部達に恐れを抱き、俺の影に隠れている。

人見知りか……うまく馴染めるといいんだけどな。

ちなみに、ルナの強さの件だが……うん、まあ、結論からいえばえらいことになった。

まとめると、こんな感じ。

名前：ルナ

種族：墮月鬼（最上位聖魔霊）

加護：大魔王の加護

称号：

魔法：???

能力：究極能力アルティメットスキル

『思考之王』ソクラテス

…思考加速・時空間操作・多次元結界・無知の知

常用スキル：『万能感知』『魔王覇気』

戦闘スキル：『▲▼■□』

耐性：物理攻撃無効、状態異常無効、精神攻撃無効

自然影響無効、聖魔攻撃耐性

なんと、元々覚醒魔王級だったルナは、俺の名付けによってさらに強化され、俺やヴェルドラと同格の最上位聖魔霊になったようだ。

まず、この究極能力アルティメットスキル『思考之王』ソクラテスがぶつ壊れすぎる。

記憶喪失の恐怖から発現したのだろう。『無知の知』なる能力がある。

この能力は、完全なる事象に対して欠損することを強制する効果をもつ。

つまり、完成された能力であればあるほど、その効果を発揮するのだ。

どれだけ恐ろしい能力か、お分かり頂けるだろうか？

さらに、各種耐性はリムル十二守護王筆頭のディアブロと同じ。

これだけの耐久性があると、俺の配下で経験を積んだルナに勝てるのはディアブロ、

ゼギオン、ベニマルの3頂点<sup>トツク</sup>くらいではないだろうか。

まあ、俺は究極能力<sup>アルティメットスキル</sup>『豊穰之王』<sup>ジユブニグラト</sup>でいくらでも劣化能力を作り出せるし、『食物連鎖』<sup>シユブニグラト</sup>によつて『無知の知』もほぼ完璧に複製可能なので、もしもの時にも大丈夫だけど。

ただし、そういう意味で注意が必要だと考えられるのが、シエルさんの『解析鑑定』でも名前すら分からなかった戦闘スキル『▲▼■□』。

元々謎が多いルナに、謎のスキル。

注意が必要な理由は、言うまでもないことだろう。

魔法についてはよく分からない。

少なくとも、覚醒魔王級以上の魔素量<sup>エネルギー</sup>は有しているので、魔法理論を理解すれば使えるようになると思う。

しかし、ソウエイとディアブロ、シユナ以外の者からしてみれば、これだけの強さを持つた者が突然現れたわけで……。

「リムル様……こは我らに任せてお逃げください！」

幹部達を恐れて俺に隠れていたルナをひっぺがし、唐突に叫んだシオン。

すぐにシユナに事情を説明されて、急いで謝っていた。

本当、なんでうちの部下はこんなに血の気の多い連中が多いんだろう。

ベニマルも刀を抜く寸前だし。

ベニマルくらいならまだいいが、シオンはなあ……。

その証拠ともいふべきか、ルナはシオンに怯えてシユナにくつついてる。

シオンは少し寂しそうだだったが、自業自得だろう。

流石に、初対面でいきなり服の袖を掴まれて、思いつきり投げ飛ばされた相手になつく奴はいない。

『暴虐之王』<sup>スサノオ</sup>を獲得するのも領ける話である。

ルナはというと、ずっとシユナに依存していて周りに馴染めるか不安だったが、しばらくすると他の女子達とも仲良くしているようだったので、問題はなさそうだ。

え？シオン？自分で信用を取り戻してもらえないよね。

こうして、ルナは幹部達に受け入れられたのだった。



二日目。ルナは、シユナに連れられて魔物の国<sup>テンバスト</sup>を散策することになった。

といつても、全てを一日で見えることは不可能だったらしく、三分の一ほど見て帰ってきたようだ。

途中でシユナと買ったクレープを片手に笑顔で帰ってきた姿はとても微笑ましかつた。

そして、『お姉さん、これ……』と、仕事終わりにお土産のクレープをくれたのは、

胸がいっぱいになった。

もう、俺お姉さんでいいわ。



六日目。今度は、ソウエイにルナの案内を任せてみた。

ソウエイは普段働きすぎなので、休ませる口実としてルナの案内を頼んだのだが……。

帰ってきたら、ルナが顔を紅潮させてソウエイをぼーっと見つめていた。

ソウエイ。お前は一体何をしたんだ。

ともかく、一つだけ言えるのは、ソーカに新たな恋のライバル出現、ということだろう。

俺は中立の立場で、二つの恋を応援することにしたのだった。



十五日目。その日は、やっと俺の仕事が一段落ついたので、ルナと二人で魔物の国テンペストをまわることにした。

ここ数日で、ルナのことはすっかり魔物の国テンペストで噂になっていたようで、『大魔王の義妹』なんて呼ばれていたようだ。

「お姉さん！次あっち行こー！」

一日中ルナに振り回されたが、ルナは終始笑顔だった。

今、疲れて寝てしまったルナは、俺の背中の上ですうすうと寝息をたてている。

この心からの笑顔を守るためにも、必ずルナの正体を突き止めようと、俺は固く誓った。



十七日目。この日からルナは、ハクロウの元で鍛練を行うことになった。

初めは心配だったが、いざ預けてみると、それからの十日間でルナはハクロウの教える魔力制御の技術をスポンジのように吸収し、『万能感知』を使いこなせるようになり、さらに『気闘法』を身に付けた。

二十七日目。十日間の成果を俺に見せたいと、ルナは俺と迷宮<sup>ダンジョン</sup>へ行くことにした。

結果は、なんと迷宮組最強のゼギオンに辛勝し、ヴェルドラにまで迫る大健闘。

これには俺も、目を丸くして驚いた。

ヴェルドラは、初めて自分のところに到達したルナに興味を示したらしく、

「クハハハハ！ルナといったか。貴様、強いな！気に入ったぞ！これからは、何度でも相手をしてやろう！」

などと言っていた。

対して、ルナは満更でもない様子で、『何度でも……』とぶつぶつ繰り返している。

——俺は、完全に油断していた。まさか、ヴェルドラが、こんなに迂闊なことをするとは思わなかったのだ。

「……お、そうだ。ルナよ！それでは、貴様に我とリムルとの盟友の証として、テンペストの姓をくれてやろう！これからは、ルナⅡテンペストを名乗るがよい！」

「え？おい！ちよつと待つ……！」

時既に遅しというやつだった。

《告。個体名：ルナとの魂の回廊が再確立され、より強固になりました。これにともない、個体名：ルナの進化が行われます。》

ふらり、とその場に倒れこんだルナを、俺が支えた。

同時に、隣から『ぐう……！』という声が聞こえてくる。

ヴェルドラ……お前……。

《全く、やってくれましたね。これは、下手をすれば私でも手に負えませんよ……。》

し、シエルさんが弱音を……？

これって、相当まずいことになったんじゃ？

と、とにかく！今はルナをどこかに寝かさない！

「じゃ、俺帰るからー！じゃあねー！」

俺はため息をつく暇もないまま、ルナを抱え、俺は迷宮を後にした。

——このあと、シエルさんがヴェルドラにお仕置きを課したのは、言うまでもないことである。



魔王達の宴当日。

町は、多くの魔物で賑わっていた。

どこから聞き付けたのか、災禍をもたらす魔王達の宴を一目見ようと、各地から魔物が大量に押し寄せたのだ。

そんな、当初の予定よりも多い来客を押し退けて進むのは、大名行列ならぬ魔王行列——オクタグラム八星魔王の面々である。

「ハハハ、相変わらずスゲエ人だな、リムル」

「お前らのせいだつつうの！」

「音楽隊の演奏の準備はしてあるのだろうか？」

「リムル！この前借りた『約○のネバー○ンド』の続き、後で貸してくれよ！あれ、今超いいところで終わっててよー！」

「姐さんはどう……？」

「先生！後であの喫茶店行きましょう！」

「リムル……！貴様……！」

「だあーっ！もう！分かったからお前ら、一回静かにしろ！音楽も漫画も全部、魔王達の宴が終わってからだ！」

魔王行列は、今回の会場である城の大広間へと歩みを進める。

今まさに、ルナを取り巻く大きな物語が、新たな局面を迎えようとしていた。

## 魔王達の宴

「さて、今日は皆、ここに集まってくれてありがとう。……と、俺は堅苦しいのは苦手だから、そういうのは抜きで。今から魔王達の宴を始めさせてもらおう！」

魔王達の宴の開催を宣言するのは、主催者の権利である。

俺の宣言を聞くと、デイーノとミリム、それにラミスが、一齐にテーブルの上のお菓手に手を伸ばす。

『はあ……』と、それぞれの従者から呆れの声が漏れた。

「ま、まあ、食べながらで良いから聞いてくれ。

皆も知つての通り、今回集まってもらったのは他でもない。

うちの領土に迷いこんだ、ある魔物について意見をもらいたいんだ。

まずは、紹介しないとな。ルナ、入ってきていいぞ」

「うん」

大きな音をたてて扉が開き、入ってきたのは一人の少女。

右側にのみ漆黒の翼を携え、眼は碧玉と紅玉を思わせるオッドアイ。

鮮やかな紫色の髪はシユナによって綺麗に整えられ、その美貌を引き立たせている。

先日の浴衣姿とはうってかわり、今日はいかにも女王といった感じの藤色のドレスを身に纏っていて、それが圧倒的な魔王覇氣と相まって、覚醒魔王級を遥かに超越した存在としての威厳が全面に現れていた。

ルナに見惚れ、コンマ数秒反応が遅れた後、すぐに魔王達が席を立つ。

全員、魔王覇氣を全開にして戦闘体勢をとっている。

「リムル……りゃ一体どういうことだ！ 明らかに、そいつの実力はここにいる魔王と同格かそれ以上！ いや……なんなら、俺やミリム、お前や竜種と比べても遜色ないレベルだぞー！」

「この気配……まさか墮天族フォールン!? それも最上位だと!? リムル、お前、一ヶ月くらい前に聞いてきたのって……!」

ギィとディーノが聖劍と魔劍を構え、俺とルナを威圧する。

こうなることは分かっていた。別にそこまで慌てるほどのことではない。

むしろ、当然の反応であると言えるだろう。

自身の目の前に、自分達の築いてきた平和を揺るがす可能性を秘めた魔物が、いきなり現れたのだから。

しかし、こうして睨み合っているのは一向に話が進まないのです、ここは皆を宥めることに全力を注ぐことにしよう。

「分かったから、一旦、剣を収めてくれ。こいつは俺の仲間だ。心配することはない」俺がそう言うと、魔王達の表情に僅かに戸惑いが混じる。

しかし、ギイ達は依然としてルナを警戒して、戦闘体勢を崩さない。

「信じて……いいんだな？」

「ああ」

ギイの質問に、簡潔に答える。

下手にここで弁明をするより、単純な yes か no かで答えた方が信憑性がある。そう考えた結果の行動だ。

ギイは初めは俺の魂を覗いて信じるべきかを確認していたが、そのうち魔剣世界<sup>ワールド</sup>を収め、その椅子に座った。

「お前がそう言うなら、俺は座るとしようか。俺は『調停者』だからな」

そう、言葉を発して。

これは暗に、『調停者たる自分の前で世界の平和を乱すならば、容赦はしない』という意味を含んでいた。

俺は頷き、他の魔王達に着席を促す。

今度は、全員が席についた。

「よし、まずは紹介するよ。こいつが、うちの領土に迷いこんだ墮天族<sup>フォールン</sup>のルナだ」



「なるほど、そういうことか。全く、柄にもなく取り乱しちゃったぜ」

俺の説明を受けて、ギイが納得したようにうんうんと頷いた。

他の魔王達にも、どうやら納得してもらえたようである。

良かった良かった。

「しかし、のう。この小娘、認めたくはないが……妾よりも強いのではないか？このような存在が、いきなり現れるとは、考えがた……」

「あ、いやそれは、ヴェルドラが名付けを二重に……」

「ん？」

「あ」

しまった。失言だった。

物凄い形相でルミナスとヴェルザードさんがヴェルドラを睨む。

ヴェルドラが顔を背けると、二人はほぼ同時に舌打ちをしてヴェルドラから視線を外した。

息ぴったりですね、お二方。

ヴェルドラの方を見ると、もう今にも泣きそうな目で俺を見ている。

ぶっちゃけ、初めに名付けをしたのは俺なので、ヴェルドラだけに非難が集まるのは

少し可哀想でもある。

ヴェルドラ、すまん。後でケーキ買ってきてやるから。

「で、皆。今の話を聞いた上で心当たりはないか？どんな些細なことでもいいんだ。少しでも思い当たることがあったら言ってくれ」

俺がそう呼びかけると、真っ先にデイーノが手を挙げる。

珍しいな。あいつでも、たまにはやる気を出すのか。

確かに、同じ墮天族フォールンだし、何らかの情報を持っていてもおかしくない。

この前は『この世界に墮天族フォールンはいるかどうか』としか聞いてないしな。

今回の話を聞いて、何か思い出したのかも……？

そんな俺の期待をよそに、デイーノは悠々と言い放った。

「この……バームクーヘンだっけ？おかわりくれよ」

はい、分かっちゃいましたとも。平常運転ですよ。

そもそも、『怠惰ベルフェゴール之王』を獲得するようなやつに一瞬でも期待したのが間違いだった。

俺はシユナにバームクーヘンを注文し、再び円卓に座り直す。

「一つ、いいか？」

話を切り出したのは、今まで沈黙を貫いていた金髪プラチナデビルの悪魔ことレオン・クロムウエル。てつきり、情報源になりうるのは長い時を生きているギイ達かと思っただが……レオン

にも心当たりがあるのだろうか？

俺は首を縦に振って、レオンの話を促す。

「その墮天族フォールンが現れたのはいつ頃だ？」

「この魔王達ワルプルギスの宴を要請した一日前だから……ざつと一ヶ月くらい前か。だが、それがどうしたんだ？」

「……偶然……とは、思えないな」

「？」

何か、あつたのか？

一ヶ月前に、レオンの治める黄金郷エルドラドで……？

「二度、休憩を挟まないか？少し、俺にも引つ掛かりがあつてな。情報を整理する時間が欲しい」

ギイが、休憩を要求してきた。

断る理由もないし、認めようと思うが、一応シエルさんにジャッジをお願いしよう。

《特に怪しい点は見られません。魔王達の中には、敵対心を持つた者はいないと思われ  
ます。少なくとも、今回の件に魔王達の陰謀は関わってない可能性が高いです。休憩を  
認めましょう。》

了解。ありがとな、シエル。

「じゃ、これから部下に各々の待機部屋に案内させるから、そこで少し休憩しよう。一時  
間後に、ここに再び集まろう。解散！」

俺の掛け声で、全員が席を立ち、扉の方へと歩いていく。

『リムル様。少し、お時間をいただいてもよろしいでしょうか?』

俺に届いたのは、ディアブロの思念だ。

なんだこんなときに?何か問題でも起きたか?

『どうした?』

『いくつか、至急お耳に入れておきたいことがございまして。執務室まで来ていただい  
ても?』

『構わないけど……思念伝達じゃダメなのか?』

『クフフフフ。実は一つ、お渡ししたいものがございまして』

渡したいもの?こんなときにプレゼントとかじゃないよな?

まあ、いい。詳しい話は、執務室で聞けばいいだろう。

『分かった。今行く』

ディアブロに思念を返し、俺は執務室へと転移していった。



「……。行つた、かな」

誰もいなくなつた会場で、眩く者が一人。

髪は長く、紫色で、藤色のドレスを着ている少女。

オッドアイの眼を妖しく光らせるその人物は、見透かすように言つた。

「居るんでしょ、ニクス。もう出てきてもいいよ」

少女の声に呼応して、現れたのは銀髪の男。

眼は少女の片目と同じ碧色で、少女と同じく碧玉サファイアを彷彿とさせる。

「……ふ、ふふふ、ふははははは！流石、流石だ！実に見事だね！」

愉快な気分を隠しもせず、むしろ誇張するように笑う男は、ひどく楽しみに少女へと近付いていく。

「うるさい。消すよ……」

少女は男に『魔王覇気』を放ち、威圧する。

が、男はそれを意にも介さず、少女の言葉に失笑しながら言つた。

「消す？どうやって？それが出来ないから、君はこの世界に逃げ込んだんだよね？」

少女は忌々しげにその眉間に皺をよせ、ジリジリと後ずさる。

次の瞬間、男は瞬時に少女との距離を詰め、その耳元で忠告するように囁いた。

「よく、考えることだね。君が守りたいものについて」

男は不敵に笑い、右手に魔法陣を描いた。

数秒後、淡い蒼色の光を放っていた魔法陣がその輝きを増し、蒼の光が辺りを覆いつくし始める。

その光が治まると、もう既に、そこには男の姿はなかった。

「……リムル、か……」

少女は、一言それだけ呟くと、悠々と扉を開き、その場を後にした。

## 刺客の襲来

俺が執務室に着くと、ディアブロが手に何やら杖のような物を持ち、跪いていた。

「お待ちしておりました、リムル様」

ディアブロが顔を上げる。やや緊張感のある面持ちは、どこか一ヶ月前のソウエイに似ていた。

「おう。ところで、何なんだ？俺に報告しておきたいことって？」

俺が尋ねると、ディアブロは手に持っていた杖のような物を俺へと差し出す。

「まずは、こちらを」

「ん？なんだこれ」

差し出されたのは、長さ三メートル程の長杖。

黒い柄の先に赤色の寶石があしらわれた、特に何の魔力も感じない杖だ。

……特に変わったところは無さそうだけど。

シエルさんに『解析鑑定』を頼もうか。

受け取った杖をシエルさんに『解析鑑定』してもらう間、ディアブロに事情を聞くことにした。

「実は一ヶ月程前、私は各地に密偵を放ち、情報を集めていました。すると、風の噂でこんなことを耳にしたのです。『カナート大山脈の近くに、新たな大洞窟が発見された』と。ですが、あそこは武装国家ドワルゴンが近くにありまますので、ほぼ探索しつくされた場所。そんなところに、未知の大洞窟？ 不自然にも程があるというものですよ。クフフフ」

樂しげに笑うディアブロ。

なるほど、大体察しはついた。

「で、お前がそこに行つたところ、最深部でそれを発見したと」

「ええ。流石はリムル様。察しがよろしいようで。クフフフフ！」

ディアブロが出張以外で魔物テンバストの国を離れていたなんて知らなかったな。

日中はずっと俺の隣にいたし……夜の間は自分の仕事をしているはず。

「いつ行つて来たんだ？」

「先程です」

「……魔王達ワルブルギスの宴中？」

「はい」

「……ちなみにどのくらいの時間かかったんだ？」

「五秒ですね」

わお、スマートに済ませたね。

ディアブロはもう、俺には勿体無すぎるような気がする。

優秀すぎて、下手をしたらこちらが劣等感を感じるくらいなのだ。

というか、確実に俺の前世の世界にいたら社内のNo. 2くらいに君臨していそうである。

そうなると、他の十二守護王あたりが各部の部長とかかな？

……シオンの部が大変すぎるな。可哀想に。

《『解析鑑定』が完了しました》

俺が下らない妄想に浸っていると、シエルさんから解析完了の報告が届いた。

おう、お疲れシエル。

それで、どうだった？何か変わったところはあったのか？

《完了、というと語弊がありますね。終了、というのが正しいでしょうか》

ん？それは一体どういう……？

《簡潔に言いますと、解析鑑定が不可能でした。この世界及びそれに連なる世界にあるどの物質とも、一致し得ない物質です。つまり、存在しえない物、ということですね》

シエルが心なしか少し嬉しそうなのはこの際置いておくとして。

……存在する物質じゃない？今までの歴史の、どこにも存在しない物質？

そんなもの、在るわけが——

俺の思考に、割り込んで入ったのは鋭い金属音。

俺に降り下ろされた漆黒の長杖を受けたのは、宙に浮いた虹色の光沢を放つ魔劍<sup>ワールド</sup>“世界”である。

その持ち主は、当然。

「何をしやがる。お前はリムルの忠実なる従者じゃなかったのか？<sup>……</sup>ディアブロ<sup>……</sup>」

俺と並ぶ世界最強の魔王、<sup>ロイド・オブ・ダークネス</sup>“暗黒皇帝”ギイ・クリムゾンだ。

「クフフフフ。流石は<sup>ロイド・オブ・ダークネス</sup>“暗黒皇帝”。私の殺気に気付きますか。鬱陶しいですね……クフフフフ！」

そして、いつのまにか俺の手から消えていた長杖を手にし、笑いを溢す人物は、俺の忠実なる配下、ディアブロ。

つまり、さつき俺を殺そうとしたのは、ディアブロだということになる。

……何故、こんな事を。

慕って来ていたんじゃないやなかったのか？

俺が、悪かったのか？俺が、ディアブロに負担をかけすぎたから……。

思えば、あんなに慕ってぐれていたのに、俺は滅多に労いをしてやらなかった。

——そうだ。俺が悪いんだ。ディアブロに、狙われて当然——

《主様！ダメです！自分を責めては！今は目の前の敵に集中するんですよ！》  
マスター

シエルの声が届き、俺は我に帰った。

……そうだよな。今は、この国を守らなきゃな。

落ち込むとかはそのあとだ。

まずは、この国と、皆を守る。それが俺の、大魔王の義務なのだから。

「ギイ。手間をかけて悪かったな。あとは、俺が片をつける。下がっててくれ」

俺はギイに礼を言うと、ディアブロに向かって『大魔王覇気』を全開にする。

だが、最大限の威圧の意味を込めたその覇気に、ディアブロは眉一つ動かさない。

流石は俺の配下で一番の強さを誇るディアブロだ。

なら、今度は『虚数空間』で結界を張るか、もしくは転移からの速攻で無力化するか。

どちらにせよ、こいつを傷つける選択肢はない。

敵対したら容赦はしないと説いたが、仲間かぞくは別だ。

何かと俺をサポートしてくれ、時には一緒に騒いで遊ぶ。

こちらの世界で家族同然のあいつらに向ける刃は、生憎俺は持ち合わせていない。

(シエル。行くぞ)

《御心のままに、我が主よ》  
マイロード

シエルとの連携体勢をとり、ディアブロを無力化する。

それが今の最優先事項。

俺はディアブロを『虚数空間』の結界に取り込むべく、ディアブロに向かって駆け出し――

「……違うな。ディアブロじゃねえ。お前、一体なんなんだ」  
ギイの放った言葉に、耳を疑った。



ギイはディアブロを真つ直ぐに見つめ、問う。

自分がここに駆け付けたのは、リムルに対しての凄まじいまでの殺気――それも、魂レベルで秘匿された僅かな揺らぎ――に気付いたからである。

そのほんの僅かな揺らぎに込められた、底無しの悪意。

あれは、無知が故に知識を求める感情。すなわち、興味。

だが、今更この悪魔が、リムルに悪意を含んだ興味など抱くだろうか。

何があるとも、主<sup>リムル</sup>を傷つけさせない。

主<sup>リムル</sup>に牙を剥くならば、過剰なまでに報復をするこの悪魔が、自ら主<sup>リムル</sup>を傷つけるなど、とても考えられない。

では、今、自分の前に立っている悪魔——いや、悪魔の形をしたものは、一体何者なのか。

「……クフ、クフフ、クフフフフ！なるほど、ここまでとは！多様性のある世界だとは思っていたが、これほどレベルの高い悪魔が居るとはな！正直、予想外だ。仕方ない。ここは一度、退くでしょう。だが、一つ、覚えておくと良い」

「お前らが抱え込んだあの墮天使は、ほぼ確実にお前らに破滅をもたらす。精々、気を付けることだ」

その言葉を放った直後、ディアブロの持つ長杖が部屋の中の光を奪うように黒ずみ始める。

しばらくして、部屋の中に光が戻ると、そこには既にディアブロの姿はなかったのだ。

「忠告……か？」

リムルが戸惑いを隠せずに呟いた。

……情報の交換は、魔王<sup>ワルプルギス</sup>達の宴で行う方が良さそうだ。

俺の仮説が正しければ、今回の事態の終結を図るには、魔王達はおろか、全世界での協力が不可欠となる。

「先に戻るぞ」

リムルにそう告げて、部屋を出るギイ。

『ヴェルザード。聞こえるか？』

『あら、ギイ。何か用かしら？』

『竜種の回線で、ヴェルググリンド達に連絡を入れてくれ。近いうち、お前らの力が必要になる、と』

『……分かったわ』

これでよし。

後は、このあとの魔王<sup>ワルプルギス</sup>達の宴で、情報の交換を行い、備えるだけだ。

レオンにも、今回の異変に何か心当たりがあるようだ。

それが、俺の仮説を裏付けるものであったなら、近々、開く必要がある。

世界の全勢力の代表による、会談。  
終末<sup>ラゲナロク</sup>の混世宴を。

## 勇者の懸念

『私にはもう、時間が無いの。だから、あなたが——』

これは、一ヶ月前私の言った言葉だ。

でも、その私は、私であって、私じゃない。

『一ヶ月……ワ……ルギス……ムル先……来訪者……ぶない。……助けて……どうか……ど……か！』

続いて途切れ途切れ聞こえてきたのは、幾つかの単語を思わせる言葉達。

恐らくは、一ヶ月後、魔王<sup>ワルブルギス</sup>達の宴、リムル先生、来訪者、危ない、助けて、どうか、と  
いったところだろう。

この感覚は、初めてじゃない。今まで幾度となく経験してきた感覚だ。

これは、そう。未来の私からのメッセージだ。

しかし、今回の記憶は、今まで思い出したものとは少し違う。

断片的で、不完全な記憶。

天魔大戦の際、世界最強の魔王——ギイ・クリムゾンと対峙した際の記憶と比べると、その差は一目瞭然だった。

まるで、スキルの効果が何かに阻害されたかのように不確定な記憶。

その原因は勿論、内容も詳しくは分からない。

だが、ただ一つ。はつきりとしていることは、未来の私が、現在の私に助けを求めたことだ。

一ヶ月後に開かれる魔王<sup>ワルプルギス</sup>達の宴で、リムル先生に危機が？

来訪者、とは一体誰のことだろうか。

それに、今のところリムル先生から魔王<sup>ワルプルギス</sup>達の宴があるなんて話は聞いていない。

この平和な世界に、わざわざ魔王<sup>ワルプルギス</sup>達の宴を開く程の出来事が起こると思えない。

……でも……。

「どうした？ そんな難しそうな顔をして。悩みでもあるのか？」

「レオンお兄ちゃん」

私に声をかけたのは、私の幼馴染みでこの都市エルドラドを治める八星魔王<sup>オクタグラム</sup>が、一柱、レオン・クロムウエル。

天魔大戦後、私はレオンお兄ちゃんの城に居候することになった。

時々ルミナスの所に遊びにいったりもするけど、基本はここで暮らしている。

……だけどいずれば、リムル先生の所に行きたかったり。

「ううん。ちよつと考え事をしてただけ。大したことじゃないから、気にしないで」

「……お前は今まで、たった一人で、長い間戦ってきたんだ。平和な今くらい、俺を頼れ」  
レオンお兄ちゃんはいつも私のことを気にかけてくれる。

長い間、ずっと一人で運命と戦ってきた、私のことを。

私も、今の平和を失うのは嫌だ。

「……ありがとう、レオンお兄ちゃん。じゃあ、聞いてもらっても良い？」

「ああ。なんでも聞いてや——」

レオンお兄ちゃんの言葉を遮るように、城内に地鳴りのような轟音が響き渡る。

空気が震撼し、音のエネルギーが城全体を殴り付けた。

ところどころ、城の壁にひびが入り、その魔力回路に乱れが生じる。

「何事だ！」

「レオン様！ご無事で！」

レオンお兄ちゃんの元に真っ先に駆け付けたのは、ブラックナイト黒騎士卿クロードとシルバーナイト銀騎士卿アル

ロス。

レオンお兄ちゃんの配下のなかで、最も忠実かつ、最強の騎士達だ。

「どうした!?この衝撃は一体!？」

「は！城の上空に、正体不明の物体が出現したとのことです。この振動は、その魔力によるものかと。ただ今、各騎士団長達が破壊を試みていますが、依然として砕ける気配が

ありません！」

クロードが報告をするのと同時に、レオンお兄ちゃんは城の外へと転移した。私もそれを追うように転移し、そこで目に入ってきたのは。

かつて戦った暴風竜、ヴェルドラのあの巨体をもしのぐ大きさの宝玉。

緑色に輝くその宝玉は、中心からエネルギーを発していて、そのエネルギーによつて城はおろか、国全体が揺れているようだった。

「二二四重カルテットスバイラル羅閃！」

四人の騎士団長の合体技が、宝玉に向かつて放たれた。

四人の魔力が混ざり合い、放たれるのは四重螺旋を描いた斬撃。

その威力は、デーモンロード悪魔公の最上位に致命傷を与えうるレベルにまで達していた。

斬撃が宝玉にぶつかった瞬間、凄まじい爆風が起こり、四人の騎士団長達を吹き飛ばす。

宝玉は全く壊れる様子はなく、むしろ中心からのエネルギーが強くなったように感じられた。

「……試すか」

レオンお兄ちゃんが呟く。

いつの間にか、背中には神々しい輝きを放つ36対72枚の翼が顕現しており、その

手には神話級のレイピア、ゴツズ 聖炎細剣が握られていた。

レオンお兄ちゃんがフレイムピラー 聖炎細剣の切っ先を宝玉に向けると、レオンお兄ちゃんを中心に、宝玉を取り込む形の積層型立体魔法陣が形成されていく。

色鮮やかな色彩により、魔法陣はそれ自体が発光と明滅を繰り返し、瞬く間に完成した。

”36式ホーリリー聖浄化霊子撃滅光崩”

レオンお兄ちゃんが叫ぶと同時に、その翼が煌めき、聖なる光を発する。

触れるものを崩壊せしめる、フォトン 霊子光が積層魔法陣の中を駆け巡った。

乱反射する光は、やがて結界内を覆い尽くし、その莫大なエネルギーが結界内を蹂躞する。

閃光が収まり、辺りの景色が見え始める。……が。

「……これほど、とはな」

その宝玉は、デイスインテグレーション ”霊子崩壊”の何千倍以上ものエネルギーを受けてなお、無傷でそこに存在していた。

「硬いね……それに……」

「ああ。あれの中心から吹き出すエネルギーは、魔力なんかじゃない」

「精霊力だ」

宝玉から吹き出していたエネルギーは、魔力ではなく、精霊力。

故に、悪魔の力を持った騎士団長達の攻撃を受け付けなかったのだ。

「私が、やろうか?」

「……頼めるか?」

「うん。任せて」

他ならないレオンお兄ちゃんアルテムツトスギルの頼み。断る理由がない。

私の究極能力『時空之神』ヨグ:ソトホトの力をもってすれば、或いは、時空の彼方に消し去ること

も可能かもしれない。

私はそう希望を抱き、宝玉の近くへと降り立ち――

「それは、させられない」

宝玉から聞こえてきた声に、愕然とした。

その刹那、宝玉がみるみるうちに縮小し、そして。

まるでその存在がなかったかのように、跡形もなく消滅した。

「何、だったんだ……?」

レオンお兄ちゃんと、二人で顔を見合わせる。

ふと、町と城に甚大な被害が及んでいるのが目についた。

まずは、私の能力でこれを直さないと。

他のことは、後でゆっくり話すことにしよう。

私の記憶の件も、宝玉の件も、気になることには気になるが、それよりも、皆の暮らしを元に戻してあげることが今の最優先事項だろうから。



「ディアブロが、消えた……」

再開された魔王達ワルプルギスの宴にて、俺が発した第一声。

お菓子にがつついていたミリムやラミス、ディーノ達がその手を止めた。

「ど、どういうことだよ!? あいつが消えただって? あれだけの強さを持った悪魔が消えるなんて、そんなの一大事じゃ——」

「落ち着けディーノ。それについては、俺が説明する」

取り乱すディーノを、ギイが鎮める。

突然配下が操られ、消えてしまった俺を慮ったことだろう。

ギイも、意外と優しいところはあるんだな。

「——というわけだ」

ギイが説明を終えると、魔王達が生唾を飲み込む音が聞こえた。

世界に、危機が迫っている。

世界の頂点に立つ魔王達には、それが理解できた。理解、できてしまったのだ。

それ故に、魔王達の間には長い沈黙が訪れる。

「……俺からも、一つ良いか？」

沈黙を破つたのは、先程意味深な発言をしていたレオン。

心当たりがあるようだったが、実際のところはどうなのだろうか。

その後、レオンから語られたのは、一ヶ月前の黄金郷エル・ドラドで起きた、原因不明の怪事件の顛末。

そして、未来のクロエから届いた、不可解なメッセージだ。

「ワルブルギス魔王達の宴……確実に、この宴だな。リムルに迫った危機は、ディアブロを操った者のことだろう」

「これは……まさか本当に……ヴェルダナーヴァ様の予言が……」

「予言、だと？」

ディーノが口にした言葉に、興味を示す魔王達。

そんな中、一人落ち着いた表情で話を始めたのは、またもやギイだ。

「お前も、やはり聞いていたか。……かつて、俺の友だったヴェルダナーヴァは、こんな

ことを言っていた。『自分がここに存在する以上、他に自分のような存在がいる可能性も否定できない』と」

「それって、つまり……？」

「ああ。ヴェルダナーヴァが創造したこの世界の他に、次元をも超越した別の世界が存在しているということだ」

魔王達が、絶句した。

この仮説が正しければ今回の騒動の全てに、辻褄が合う。

正体不明の墮天族<sup>フォールン</sup>、この世界に存在しない杖、あのディアブロをも操る強者の存在、膨大な精霊力を秘めた巨大宝玉。

これらが全て、異世界から持ち込まれた物だったとしたら……？

俺が斜め後方に目を向けると、ルナは不安そうな顔で俺を見つめていた。

その瞳はオッドアイから両目とも碧<sup>サファイアブルー</sup>玉色に戻っており、さつきまでの覇気がまるで感じられない。

この数日で分かったことだが、ルナは戦闘などの警戒状態になると右目の色が青から赤へ変化するようだ。

逆に、不安になると両目が深い青色に染まる。

その事からも、今のルナの不安な心境が伺えた。

「ヴェルダナーヴァは、俺や各竜種にこの予言を授けると同時に、異世界からの干渉が起きた場合の対処法についても指示していた。これこそが——」

「全世界の力を結集し、世界の終末に抗うための会談。終末の混世宴、だろ？」

デイーノの言葉に、こくりと頷きを返すギイ。

次いで、ギイは椅子から立ち上がり、宣言した。

「近いうち、この魔物の国にて、終末の混世宴を執り行う。各国の国王及び重要人物、次元を越えて遭遇した世界の住人の代表を、ここに集結し、異世界からの危機に立ち向かう計画を立てる。各々、国交を結んでいる国に早急に連絡を。開催は一ヶ月後、正午からとする。それまで、それぞれの準備を整えろ」

「分かったのだ」

「了解じゃ」

「OK」

「……ああ」

「分かった！」

「了解ですぜ」

「いいだろう」

各魔王達がギイの宣言に肯定の意を示し、真剣な表情で返答する。

その傍らで、僅かに俯く少女が一人。

真なる勇者、クロエ・オパールである。

(これで、本当に良かったの……？リムル先生への危機は、去ったの？)

クロエは、得体の知れない胸騒ぎに、戸惑いを覚える。

何か、大事なことを忘れていいるような、そんな感覚。

そんなクロエの心境とは裏腹に、時は無情に過ぎていく。



魔王達の宴が終了し、その夜。

俺はルナと一緒に、夜風に当たりながら夜の魔物の国を歩いていた。

流石にここまで深夜になると、皆寝静まってしまって、昼の間の騒がしさが嘘のよう  
だ。

「ねえ、リムルお姉さん」

「なんだ？」

「私、外から来たの……？」

「……………そうだな」

「私、ここにいていいの……………?」

「ああ。記憶が戻るまで、俺達が責任を持ってお前を守るさ。とはいっても、今のお前は多分、この国で俺とヴェルドラ、ディアブロの次くらいに強いだろうけどな」

「……………ふふ。私、もつと強くなる」

ルナは、その碧<sup>サファイアブルー</sup>玉色の美しい瞳をキラキラさせながら、俺に向かって笑いかけた。

……………確かに、魔王<sup>ワルブルギス</sup>達の宴にてルナが別の世界からのスパイである可能性があることが話題にあがったのは事実だ。

それでも俺には、この隣を歩む少女が嘘を吐いているようには思えない。

一ヶ月という短い時間は、思った以上に俺達の絆を育んでしまった。

もし、万が一ルナが別の世界からのスパイだったとしたら、俺は――

『どうする?』

「え?」

「?どうかした?お姉さん」

ルナが、きよとんとした顔で俺を見る。

気のせい……………なのか?

「……あ、いや、何でもないよ。それより、そろそろ戻るか」

「うん……あ！そうだ。明日の朝御飯、私が作ってもいい？」

「え？できるのか？」

「うん。ちゃんとシユナさんに教えて貰ったから」

「そうか。じゃあ、お願いしようかな」

「やった！ありがとう！お姉さん！」

俺からの許可を得て、満面の笑みを見せるルナ。

……今はまだ、万が一とか、難しいことは考えなくても良いかな。

魔物テンペストの国の夜空に浮かんだ美しい半月が、二人の魔物を照らしていた。

## 星王の再臨

『さて。これでよし、と』

……？

『ちよつとした誤算で予定が狂ったけど』

誤算？ 予定？

『そろそろ、こちらも動き出さないとね』

動き？ 一体、何の……って、そもそも、お前は誰だ？

『ボクかい？ ボクの名は——』



「リムル！ 起きるのだ！ 今日<sup>マフダチ</sup>はワタシが起こしにきてやったのだぞ！」

「うーん……だ、れだ……」

「むー！ 親友<sup>マフダチ</sup>たるワタシを忘れるとは……！ これでも食らうのだ！」

俺の腹にエルボー。

この世の頂点の一人たる魔王のエルボーは、比類なき鉄槌となつて俺の腹に打ち下ろされた。

「いつ………てえええええ！」

「あ、起きたか？おはようなのだ！」

普段、より生活感を出すために切っていた『痛覚無効』と各種耐性が祟つたな……。目の前でニコニコと笑う桜金色ブラチナピンクの髪的美少女——ミリムは、微塵も悪いとは思つていなさそうだ。

「起きたか？じやない！またお前は俺の布団に……！」

「そんなことはどうでもいいのだ！早く！早く準備するのだ！今日はワタシと遊ぶ約束だろう？」

ミリムは俺を急かすように揺さぶり、喚いている。

一昨日はシュナ、昨日はシオンときて、今日はこいつ。

ディアプロがいなくなつてからというもの、俺の静かな朝は終わりを迎えてしまったのだ。

ディアプロ………必ず連れ戻すぞ………俺の平穏な朝のためにも。



「さて、行くか」

「おーー！」

「うわっ！うるせえお前ら！静かにしろ！」

大声を出したミリムとゴブタを注意する。

全く……これがバレたらどうするつもりなんだ。

一応、『並列存在』と『擬態』、その他諸々のスキルで俺達の偽者は作ってきたが、そもそもこちらが見つかっては言い逃れようがない。

絶対に、見つかるわけにはいかないのだ。

もう二週間後に迫った終末の混世宴だが、未だに西洋諸国のいくつかの国から、出欠の返事が来ていない。

巷では『ついに魔王が世界の実行支配に乗り出した』なんて主張も出てきていて、俺達魔王は各国の信用を得ようと四苦八苦している状況だ。

そんな中、ミリムと俺が釣りに出かけたって知ったら、魔王達が何をするか分かったもんじやない。

特にギイなんて、信頼を得るためにお得意の恐喝を封印し、営業スマイルで頑張っているらしいからな。……まあ、結果調子に乗って国のトップが半殺しにされたケースが殆どだが。

それでも、着実に全世界は一体となりつつある。

このままいけば、二週間後の終末ラッの混世宴ナは滞りなく行うことができそうだ。  
「お姉さん。釣りつて、楽しい?」

俺の隣を歩いているルナが、目をぱちくりさせながら聞いてくる。

今回、本当は俺とミリムだけで行くつもりだったのだが、途中でゴブタとルナに見つかってしまい、二人もこうして連れてくることで口封じを図ったのだ。

「ああ、好きなやつは結構好きだと思っぞ」

「ふーん……」

そうこうしているうちに、お気に入りの釣り場へとたどり着いた。

釣竿を取りだし、一人ずつ手渡していく。

「ここに、これをつけるの?」

「そうだ。それで……」

せつせと釣りの準備をしている俺の脇では、ミリムがルナに釣竿のセットの仕方を教えていた。

ミリムが何かを教えるなんて、珍しいこともあるもんだな。

ゴブタとカリオン? あれは遊びも入っている……というかそっちがメインだからノーカウント。

しばらくして、俺達は皆それぞれに釣糸を垂らし始めた。

何もないうまま、少しずつ時が過ぎていく。

ミリムは飽きてきたのか、俺が持つてきたおやつをつまむペースが段々早くなつてきている。

それとは対照的に、ルナの方は落ち着いていて、この釣り独特の時間を楽しんでいるようだ。

はは……さつきはミリムが姉のように見えたが、これじゃルナの方が精神年齢は高そうだな。

「おつ、あたりだ」

下らないことを考えていると、俺の竿に反応があつた。

釣り上げてみると、釣糸の先にそこそこの大きさの川魚が、日光を浴びて鱗をキラキラと光らせている。

俺は針を取り外して魚をバケツに入れると、再度水面に針を投げた。

『あ……………聞く……………るか……………か?』

魂に響いてきた声。

どこかで聞いたような……………。

あれは確か……………夢の中で……………?

いや、少し前に二回ほど聞いた気がする。

この声は……誰なんだ？

『あ……あ……ながった。ふう……やつとだ』

その声が聞こえたかと思うと、俺の体から、ガクンと力が抜けていく。

あ、あれ？力が入らないどころか、スキルも使えないような？

こ、これは一体!?!シエルさん！

《告。心核ココロが魂から切り離されました。何者かが、主様マスターの魂から干渉を行っています!》

魂からの干渉？その魂は俺の难道ぞ!?

何者かって……俺以外に誰がいる？でも、俺はやってない。

どうなってるんだ!?

『うん。確かに、この魂は君のものだ。でも、気づかなかったかい？何故、君が竜種の因子に適合することができたのか。何故、君がヴェルダですら再現不可能だった虚無崩壊を扱えたのか。その理由には、このボクの存在があつたんだ』

何者かから告げられた言葉。

俺はその言葉と今までの情報から、この声の正体について一つの答えを導きだした。

竜種の因子、虚無崩壊。未だ復活しない始まりの竜種の存在。

そう、俺がたどり着いた答えとは――

『やあ、リムル・テンペスト。ボクは“星王竜”ヴェルダナーヴァ。この世界を創りし

存在モノにして、君の前世の記憶だよ』  
至高にして最強の存在が、今ここに再臨した。

## 星王の要求

力が入らない。スキルも自由に使えない。

『魔力感知』によつて情報は入ってくるが、こちらからは意思が全く伝えられない。

「ど、どうしたのだ！リムル！しっかりするのだ！」

わたわたと騒ぎ立てるミリムの声が聞こえる。

”星王竜”ヴェルダナーヴァ……ミリムの父親にして、ヴェルドラの兄。

そして何より、この世界を創造した存在である。

そいつが実は俺の前世だったらしい。

……オイオイオイちよつと待ってくれよ。

待て、時間をくれ、落ち着くから。……あ、素数は数えないよ？俺が素数を数えられないことは転生したての頃に判明しているからな！

えーと……なんか色々と頭が追い付いていかないんだが……要するに……。

（俺の前世の娘がミリムで、その前世と俺が何故か同じ魂に同居してる状態だった、ってことか？）

『そういうことになるね。まずはボクの今の状態について説明しても良いかい？』

展開が早すぎてついていけない、というのが俺の本音だ。

この人（というか竜）少しせっかちすぎると思う。

こういうイベントが起こったときは、落ち着くまで待つてあげるのがテンプレだろ。

とても悠久の時を生きてきたとは到底思えない。

ミリムもこいつに似たんだろうか。……いや、あいつはせっかちって言うよりお子様  
なだけか。

（ああ。出来るだけ簡単にな。生憎俺の思考力はもう限界にきてるんだ）

俺はヴェルダナーヴァに要点を絞れという意味を含めて言った。

これで分かってくれよ、頼む。俺には生憎理解力がないんだ……！

『君の思考力が限界でも、君には頼れる相棒がいるじゃないか。心配は要らない。魂から君の心核を切り離れた時に、神智核君も同時に切り離して接合しておいたからね』

そう言うのと、ヴェルダナーヴァは今の状態についてだらだらと説明を始めた。

……俺の言葉の含みにも気づけないなんて……本当に至高の存在なのか？

《はい。》星王竜「ヴェルダナーヴァは、正しくこの世界を創造した存在であることが  
確認されています》

し、シエルさん、居たんですね。そういうえば。

突然で悪いんだが、ヴェルダナーヴァの言ってることをまとめてくれるか？無駄に話

が長いんだ。

《分かりました。できるだけ短く要約を行います。》

そして、シエルさんにまとめてもらった情報がこちら。

まず、自分の意思が芽生えたのは俺がこの世界に生まれたのと同時であるということ。

その時点ではまだヴェルダナーヴァの頃の記憶もない状態だったが、本能のままに記憶を求めて活動することはできたらしい。

曰く、俺の深層意識の中で、魂に残された微かな転生前の記憶を延々と遡り、ヴェルダナーヴァの記憶を元に、心核<sup>ココロ</sup>を再構成することに成功したのがなんとヴェルドラと出会う三日前。

原理としてはヴェルダの創った記憶<sup>メモリー</sup>の宝珠<sup>オーブ</sup>と似ているが、元となった心核<sup>ココロ</sup>が本人のものだったが故に、完全なヴェルダナーヴァの心核<sup>ココロ</sup>を造り出すことに成功している。

まあ、この手法が成功したのは『竜種は不滅である』というこの世界のシステムの影響もあるのだろう。

『そういうわけだから、ボクは今まで君の魂の奥底に暮らしていたんだ。時空の果てで君が眠っている間に、やっと深層意識から抜け出すことができ、君の心核<sup>ココロ</sup>にも何度か話しかけたんだけど……気付いたかい？』

……あ。そういえば。

最近、俺の幻聴がひどくなってると思つたら……そうか。ヴェルダナーヴァが話しかけてきてたのか。

いやあ、もう俺のスライムボディの寿命を疑い始めてたんだよな。不老不死の筈なのに幻聴なんて、道理でおかしいと思つた。

(まさか自分の前世が語りかけてきてるなんて、分かるわけがないな。はっはっは) 『アハハ……さて。積もる話は後にして、本題に移ろう。まず、この体の主導権は君に返す。その代わり、一つ頼みを聞いてくれないか?』

(頼み?)

まさか地上を滅ぼせとか言わないよな?

俺のせいで発展しすぎてるのか、そんなこと言われても責任はとれない。

どうか易しいお願いであつてほしいものだ。

俺が祈りながら返答を待っていると、ヴェルダナーヴァは要点を手短かに伝えてきた。

『君の発明品の一つに、宝珠ギジコンというものがあつただろう? あれをボクの心核ココロの投影先として譲ってほしい。あとは肉体だが……そうだ! ユウキとかいう人間がボクの墓を荒らして創つた剣。あれを元に魔法人形を作つてくれ。そこからはボクのチカラで何とかするから』

つまりは、ヴェルダナーヴァ星皇竜角剣ギシコンに宝珠をはめて作り替えてやればいいわけだ。

なんとかならないことも無さそう……か？

どうでしょうシエルさん？

《二、三日ほどかかっても？》

べ、別に良いですが……。

《でしたらお任せください！最高の出来にしてみせますよ！》

声高に宣言するシエルさんの声は、今までで一番わくわくしているように聞こえた。

……あれ……シエルさんにとっての『最高』って……。

ゼギオンとか、ゼギオンとか、ゼギオンとかの前科があるシエルさんに頼んで大丈夫

だろうか……。

いや、あまり深く考えるのはよしておこう。話が前に進まない上に、もうこんなに張り切ってるシエルさんに今更『やっばいい』だなんて言えない。

『結論は出たかい？』

シエルさんに『ほどほどに』するよう忠告をしようかと思案していると、ヴェルダナーヴァから、返答の催促が来た。

ま、いいか。ヴェルダナーヴァに限って性能が良すぎてもて余すなんてことは流石にないだろう。

というわけで、俺はヴェルダナーヴァに条件を承諾することを伝え、体の主導権を譲り受けた。

徐々に体の感覚が戻り、身体中に自分の意思が行き届いていくのが感じられる。

「あ、あ、よし。喋れる」

「リムル！良かったのだ！ずっとだんまりだったから心配してたのだから！」

俺が久し振りに口を開いたからか、泣いて喜ぶミリム。

その腕は例のごとく、俺の体をしっかりと掴んでいた。

やめて！揺らさないで！ちぎれる！リムルの二の舞になっちゃう！

「それにしても、急に黙りこんでどうしたのだ？誰かと思念伝達でもしていたのか？」

「……秘密」

「ええ！なんで！ワタシは親友マフダチだろう？隠し事はせぬのだろう？それとも、あれか！ワ

タシが知ったらマズイことなのか？」

「いや、そういうことじゃなくて……」

誰か『お前のお父さんと話してたんだよ』なんていえるか。

しかも、それを話すにはもれなく俺の前世がヴェルダナーヴァであることもカミングアウトしなければならぬわけだ……。

とにかく、本当のことを話せばほぼ確実にミリムのテンションがハイになってしま

う。

「迷宮とかならともかく、こんなところでミリムにハイになられたら俺でも手に終えない。」

「……分かった。じゃあ、こうしよう。ミリムに大事な話がある。だから、三日後の昼、迷宮に来てくれ。今日のこと、そこで話す」

「どうしても、か？」

「そうだ」

俺がきつぱりと言うと、ミリムは少しガツカリしたように肩を落とすと、低いトーンで返答を返した。

「分かったのだ」

よし。あとは、三日後までに皆に連絡をとって……なんか凄いデジャヴなんだけど。ルナの件でも皆を集めたからなあ……今回は竜種達だけで良いか。

どうせ二週間後には終末の混世宴だ。魔王達には、その時にでも紹介すれば良いだろう。

「……もう、良いかな」

不意に後ろから声が聞こえた。

見ると、バケツ一杯分を川魚で満たしたルナが、釣りの用具をしまい始めたところ

だった。

ちよ、ちよつとルナ？俺ほとんどやってないんだけど……。

「だって、姉さんは黙ってるし、ミリムは姉さんにずっとくつついてるし、ゴブタは寝てるし、魚はもういっぱい釣った。そろそろ連絡をいれてもいいよね」

連絡……？つて、まさか！

「おいルナ！待つ……！」

「リムル様。お迎えに上がりました」

そう、クールに言い放った鬼。

俺の目の前に突如として現れたソウエイの表情は、まるで氷のように冷たく、真剣だった。

「リムル様。申し訳ありませんが、ディアブロ不在の今、勝手な行動はご遠慮いただきました」

「わ、悪い……」

俺が謝ると、ソウエイはルナに向き直り、一言。

「ルナ様。ご協力、感謝します」

「う、うん。その代わり、約束はちゃんと守ってね」

「御意」

ソウエイの言葉を聞いて、僅かに頬を赤らめるルナ。いやいや、おかしいよね？  
ルナ……お前ってやつは……。

恋する乙女の前では、どんなものも無力なのだろうか。  
こうして、俺達は魔物の国への帰宅を余儀無くされたのだった。

## 鬼姫の奇行

「うう……近頃の朝は冷える……我が君は何故このようなことを……」

僅かに空がしらみ始めた頃。

”破滅王<sup>メナスロード</sup>” カレラは、主への素朴な疑問をぼやきながら主の寝室へと向かっていた。

三日前、リムルが国を抜け出し、友人や部下と遊びに行っていたことが分かり、それ以来リムル十二守護王が交代で護衛につくことになった。

それに伴い、朝に我が君を起こす役割が護衛の仕事になったため、今日の当番であるカレラがこうしてリムルの寝室へと向かっているのだ。

「我が君に做つて耐性を切つてみたはいいものの……これのどこが良いのかは分からないな。やはり、我が君の崇高なる嗜好を、私が理解しようなど傲慢だったか」

そんなことをぼやきながら廊下を進んでいくカレラ。

寒いなら耐性を戻せば良いだけの話なのだが、もしも仮に戻して、同僚のウルティマとテストアロツサが涼しい顔をしているのを見かけたなら？

「……ダメだ」

貧弱だと馬鹿にされるのが目に見えている。

そんなことは、誇り高いカレラのプライドが許すはずもなく。

「我が君に近づいたため、我が君に近づいたため、我が君に近づいたため……」

カレラは自分に暗示をかけながら、廊下を歩く。

しばらくして、カレラはリムルの寝室の扉の前へとたどり着いた。

凍える手で扉をノックする。

「我が君。おはようございます。破滅王<sup>メナスロード</sup>カレラ、お迎えにあがりました」

声をかけるとすぐ寝室の扉が開き、中から寝間着姿のリムルが顔を出した。

「ありがとう、カレラ。今支度するよ」

「お手伝い致しますか？」

「いや、いい。それより、今日の予定を確認しておいてくれ。ディアブロが居なくなつて

から、スケジュール管理が大変なんだ」

「左様ですか。では、ごゆっくりどうぞ」

バタリ、と扉が閉まると同時に、カレラはリムルの言動に違和感を覚えた。

「……スケジュール管理が大変？我が君は確か、演算の能力をお持ちのはずでは……？」

そんな疑問を呟くカレラ。

だが、思慮深いリムル様のことだ。何か事情があるのだろうと考え、あまり深く考え

ず、そのまま扉の前で待機することにした。

『リムル様。夜分遅くに申し訳ございません。至急ご報告したいことが』

真夜中に届いたソウエイの思念伝達に、熟睡中だった俺の意識は一気に覚醒した。

夜中に緊急の報告があるなんて、本来ならばあり得ないのだ。

それこそ、よっぽどのことでもない限り。

『何が起きた？』

『は、先程、シユナ様が魔物の国を出て何処かへと転移なさるのを、『月の瞳』にて確認しました』

『転移？シユナが？何故……』

『それが、俺にも分からないのです。シユナ様に声をかけようと思い、そこへ転移を試みたものの、その空間への侵入が拒絶されてしまい、結果的に見失ってしまいました』

『結果が張られてたつてことか？』

『いえ、そのような形跡は認められませんでした』

結界ではない空間への侵入拒絶？

(そんなこと、俺ですらできない……よな?)

『いえ。個体名：ルナの『無知の知』を行使すれば、一度接触した相手へ一時的な能力妨害を行うことは可能です。ですが、それを行使できるのは現在、個体名：ルナと主様の

み。個体名：シユナが行ったというのは考えにくいと思います。》

となると、消去法で能力妨害はルナの仕業ってことになるが……。

「う、ん……姉さん……どうか、した……？」

隣で眠気MAXの声を発するルナの姿を確認し、俺はその可能性を切り捨てた。

だが、だとすれば今回の出来事の辻褄が合わない。

少なくとも、俺達が認知するこの『世界』のみでは。

『シユナの行き先は分かるか？』

『いえ』

『そうか……ありがとう。じゃあこつちでも探してみるから、お前らも引き続き探索を頼む。くれぐれも無理はしないようにな！』

『御意』

そうして、ソウエイとの思念伝達は終了した。

しかし……不味いことになったな。

ただでさえ、終末<sup>ラッ</sup>の混世<sup>ッ</sup>宴<sup>ナ</sup>絡<sup>ク</sup>みでバタバタしてるっていうのに、そこにシユナの謎行

動十失踪とは。

……これは、久々に気を引き締める必要がありそうだ。

『ヴェルダナーヴァ、聞こえるか』

『ヴェルダで良い。君とボクの仲じゃないか……と、そんなことを言っている場合じゃないようだね』

魂から、冷静で強かな声が強い意志を伴って返ってきた。

『ヴェルダ。俺の言いたいことは分かるな?』

『……ああ。恐らく、ご期待に応えられると思うよ。ボクはこれでも、君たちの創造主だからね』

ヴェルダの声が説得力に満ちたものであるのは、気のせいではないだろう。

そう信じて、俺は『虚数空間』の中でシエルさんに思うがまま魔改造フルチェイリナックを施されていた星皇竜角剣を取り出した。

もはやそれは剣の原型を留めておらず、最高品質の究極ヒヒイロカネの金属 によつてデコレーションヴェルダナーヴァされた一つの芸術作品と化している。

かつて、ウルグレイシア共和国にて創造した最高傑作、ベレッタに勝るとも劣らないその出来栄えに、俺は思わず感嘆の息を漏らした。

(流石はシエル。凄まじい出来だな)

《ええ。少々奮発して、貯蔵していた究極ヒヒイロカネの金属を大量に使用しました。おかげで、これ以上ない出来に仕上がったと思いますよ!》

シエルさんの興奮っぷりが、声から直に伝わってくる。

尻尾でもあつたら、振りまくっているんじゃないだろうか。

そんなことを考えつつ、俺は『虚数空間』から宝珠ギジュを取り出すと、魔法人形の胸の辺りに埋め込んだ。

思いの外すんなりと宝珠を呑み込む魔法人形。次いで、その胸に手をあてがい、魂に再度問いかけを行う。

『準備はいいか?』

『いつでも』

その短い返答に込められた強い意志を感じ、俺はヴェルダナーヴァの心核ココロを、魔法人形に投影し――

――直後、部屋の中を、眩い光の奔流が埋め尽くした。